

家庭の仕合わせは、夫婦愛和から

皆さま、おはようございます。

残暑もようやく和らぎ、澄みきった青空を爽やかな秋風が吹きわたる季節となりました。この佳き日に、こうして無事に令和の時代初の大会を迎えることができましたことを、皆さまと共に喜び合いたいと思います。

さて、夏の暑さが厳しければ厳しいほど秋空を見上げると、一抹の寂しさが感じられます。

かの夏目漱石は、俳人としても知られ、数々の句を残しました。そのなかにこんな一句があります。

肩に来て人懐かしや赤蜻蛉あかかんとんぼ

秋になり赤とんぼはしばらくぶり人間を見て人懐かしく感じたのか、自分の肩にとまったというのです。きっと漱石も秋の寂しさ、人恋しさを感じたのでしょう。

急に涼しくなり秋風を浴びると、過ぎ去った時を回想し、取り残されたような孤独を感じるときがあります。そんなときに思い浮かぶのがやはり家族の顔です。亡き家族を回想する人もいれば、離れて暮らす家族に思いを馳せる人もいます。男性なら、奥さんの顔を思い浮かべる方もいらつしやるのではないですか。特に子育て真っ最中の男性なら、やはり奥さんの苦勞を思わずにはいられません。「家事や育児を手伝うと言いながら、仕事にかま

けて何もしなかった。これからはもっと手伝って、少しは妻をいたわろう」などと殊勝しじやうな気持ちにもなります。

一方、奥さんは誰を思い浮かべるのでしょうか。お子さんのいる家庭なら真っ先に子どもの顔を思い浮かべるでしょう。ご主人を思い浮かべるといふ方は、まずいない。最初に子どもの顔を思い浮かべて、「昨日は少し厳しく叱ってしまつた。これからは善いところを褒めてあげよう」などと思うようです。

いかに仲のよいご夫婦でも、家族を思うときの優先順位は、女性の場合は子どもを思い浮かべる。ご主人の場合は奥さんを思い浮かべるといふわけです。

もちろん私も、真っ先に愛する妻の顔を思い浮かべます。何せ私の趣味は女房でございます。実に高尚な趣味を持つているのでございます。ちなみに、妻の趣味も私だそうす。

それはさておき、男性と女性の感じ方にはこのような違いがあるのです。生物として見れば、オスとメスですから性差によって感じ方が異なるのは当然でしょう。さらに夫・父親としての立場、妻・母親としての立場とそれぞれ立場が異なりますから、夫婦といえども家族への考え方、想い、子どもへの責任感にも当然違いがあります。

そのせいか夫婦はいつも円満でいるというわけにはいきません。時には些細なことで衝突します。お互いに仲良く

しようと思つてはいるのです。そのために、それぞれの立場を理解し、相手を思いやつている。にもかかわらず、つい余計なひと言を言つて、それがもとで諍いさかひに発展してしまふことがあります。夫婦関係を良好に保つことは意外に難しい。

そこで本日は、家族の土台である夫婦の関係、夫婦愛和をテーマに、お話ししたいと存じます。夫婦が愛和していくためにはどうしたらいいのかということ、皆さんと一緒に考えてまいりたいと思うのです。

ところで、これだけ多くの方が参加されているのですから、本日の話には、直接自分には関係ないと思われる話題があるかもしれません。気に障さわる部分も出てくるかもしれません。しかしながら、家族の問題は、広い意味で人間の問題です。そこには、人間としてどのように生きるべきか、どのようにあるべきかへのヒントが含まれているはずです。どうぞ、そのような広い視野と、大らかな気持ちでお聞きいただき、これからの暮らしに役立てていただければ幸いです。

さきほど、夫婦関係を良好に保つことは意外に難しいと申し上げました。それは夫婦のそれぞれに努力が足りないからというわけではありません。夫婦も家族も大きな時代の流れのなかにあつて、その変化の影響を受け、さまざま

なストレスにさらされているからです。時代によって、家族の構成も変わってきました。かつては父家長制で家長となる長男が責任を担う大家族がありました。それが戦後、民法が改正され、産業構造の変化とともに核家族が主流となったのです。ところが今や結婚する人も減り、核家族どころか家族そのものが少なくなってきたといわれています。また、ひとり親家族、単身家族など家族形態も多様化しておりま。

しかし、どんなスタイルであれ、人間は家族をつくらねば生きる意味を見出しにくい存在なのではないかと考えます。家族は人生に生きる意味を与えてくれます。時代がいかに変わろうと、家族の大切さに変わりはないでしょう。

その家族をつくる原点が、一人の男と一人の女、つまり夫婦です。この一組の夫婦が家族の仕合わせの原点です。

情報技術の進展で社会状況は急速に変化していきます。変化のなかで家族の存立が脅かされるときが来るかもしれません。天災もくるかもしれない、不況になるかもしれない。でも、いかなる状況になろうと、その状況と闘って家族を守るのは夫婦——夫と妻、あなたたちなのです。社会の変化から家族を守るために、私たちが武器とするのが「夫婦愛和」でしょう。

だからこそ、家族を守るためにも夫婦は愛和しなければならぬ。もし夫と妻が、些細なことで、子どもの前で諍

いを繰り返していたらどうなるでしょうか。夫婦にとつては日頃の不満を言い合う些細な言い争いに過ぎないものでも、子どもの目にはまったく別の様子に見えるそうです。夫婦喧嘩が子どもの脳と心を傷つける原因になると、NHKの「クローズアップ現代+」という番組が紹介していました。

夫婦喧嘩といってもさまざまレベルがあります。言葉だけで言い争うものもあれば、激しくののしり合うものもあります。場合によっては暴力をともなうケースがあるかもしれません。しかし、いかなる争いであっても、父親と母親が子どもの前で喧嘩する姿を見ると子どもの心と脳は傷つくそうです。

一つの例として、番組の夫婦喧嘩を紹介しましょう。

夜遅く、夫が帰宅すると、玄関の三和土に子どもたちの靴が脱ぎ散らかされています。日頃から、妻の家事や育児の仕方に不満を抱いていた夫は、いい機会だから注意しようと考えたのでしよう、大きな声でリビングにいる妻を呼びつけます。

「おい、ちよつと見に来い。靴が脱ぎっぱなしになってるぞ」

奥から出てきた妻に、散らかった靴を見せて、「こういうしつけをしていると、子どもがダメになってしまう」と叱りつけます。「外ではきちんとつけていますから……」

と妻が答えると、「家でできないことは、外でもできないんだ。口答えするな」とさらに激しく怒るのです。この主人は食事のときも、「お前はいつまでたつても料理がうまくならない」と妻をバカにし、「誰のおかげで飯が食えてると思ってるんだ」などと言うそうです。この夫は、日頃から言葉に情け容赦がありません。

玄関での父と母の激しい口論を聞いている子どもはどのように感じるでしょう。どちらが正しく、どちらが間違っているかなどは子どもにはわかりません。

問題なのは父親と母親が争っているという事実です。信頼を寄せ、愛情を感じている父と母が激しく争う姿に子どもは強い恐怖心を感じます。幼いころから夫婦喧嘩が日常的に繰り返される家庭で育った二十歳の青年は、「生きた心地がしなかった。まるで戦場にいるような気がした」と証言しています。

いかに模範的な家庭でも夫婦喧嘩がまったくなくないという家庭は珍しいでしょう。時に夫婦は喧嘩をしてしまうものです。でも、それがゆきすぎ、頻繁に繰り返されると、子どもの心や脳にダメージを与えると専門家は語ります。似たような経歴をたどった若者で、過去に夫婦間の身体的な暴力、夫が妻を殴るといった暴力ですが、それを目撃した人と、言葉の暴力に接した人のそれぞれを選んでMRI（磁気共鳴画像法）で脳を調べると、どちらも脳の一部分が萎

縮していたそうです。夫婦喧嘩の影響です。

でも、暴力をともなった夫婦喧嘩を見てきた若者の萎縮率が三・二パーセントだったのに対して、言葉の暴力を見聞きした若者は一九・八パーセントと、言葉の暴力のほうが身体的な暴力の六倍も脳の萎縮率が高かったそうです。言葉だけの言い争いならいた問題はないと考えるかもしれませんが、それが頻繁に繰り返されるようだと、子どもの脳の萎縮を招くことになるのです。

そのような環境で育った子どもは、感情のコントロールができなくなったり、怒りや不安を抑えられなくなったりするといえます。夫婦喧嘩は子どもの成長にも害を及ぼし、記憶力や学習能力の低下も招くのだそうです。

言葉で言い争うのが悪いのなら、お互いに言葉をお互いに無視すればいいと思う人がいるかもしれません。いわゆる夫婦の冷戦です。しかし、子どもは鋭敏にそれを見抜いてやはり傷つくのです。「お父さんとお母さんの仲が悪いのは自分のせいだ。自分が悪い子だから喧嘩をする。もっと頑張ればいい子になれば、きっと仲良くなってくれる」。子どもはまず自分を責めます。それでも二人が互いを無視していれば、子どもは、自らをダメな存在として否定するようになり、自尊心を持ってなくなってしまうとい

うのです。少年犯罪の病理を調べたノンフィクション作家の石井光太